

里山から減ったきのこ

坂井奈緒子

秋になり、雨ふりが数日続いた後の林の中には、きのこがたくさん出ています。きのこ採りを楽しみに林に入る人も、多いことでしょう。きのこは、糸のように伸びる菌糸（きんし）が、胞子をつくって飛ばすためにつくった傘です。菌糸は、林の土の中に張りめぐり、種類によって、樹木と共生したり、落ち葉や朽ち木を分解したり、生木を分解したりして生きています。

里山に暮らす人々は、かつては、農作業の合間にきのこをよく採り、塩づけにして保存食にし、冬の大切なおかずにしていました。

最近、きのこはとても少なくなったと言われるようになりました。きのこ採りを長年されてきた方の話をお聞きすると、きのこが多く採れたのは、昭和50年代はじめまでだったそうです。きのこの種類や発生状況は、どのように変わってきたのでしょうか。

今回の里山自然環境調査では、富山市三熊周辺と山田赤目谷周辺に発生するきのこの種類を調べました。かつてのきのこの発生状況については、きのこ採りをされている方からお話を聞いたり、文献を調べたりしました。

●かつては“きのこの山”だった

八尾町に住んでおられる共同調査者の高島利男さんの話によると、昭和50年代はじめまで、三熊や山田赤目谷周辺は、“きのこの山”という言葉通り、きのこの種類も量も大変多かったそうです。

三熊地区では、9月から10月にかけてニセマツタケ（地方名でサマツ）、サクラシメジ（アカメ）やマツタケ（ホンマツ）が多くとれました。サクラシメジは嵩（かさ）があり、よく塩づけにして保存食にされまし

た。マツタケが大変よく出ていたのは、日当たりがよく、土壌が少ないやせたアカマツ林でした。しかし、その林は昭和35年(1960年)にゴルフ場ができて無くなりました。

山田では、ナラタケ（モタセ）やホウキタケ（ネズミタケ）などがよく採られ食べられていました。

統計書に載るマツタケの生産量（図1）を見ると、県全体で昭和35年度に1833kg、昭和45年度に408kgが採れていました。婦負郡に含まれていますが、山田村でも昭和40年度には100kg、昭和45年度には10kgが採れていました。しかし、昭和50年度には数値にならないくらいに減り、昭和60年度には統計書からマツタケの項目が無くなりました。

この急激なマツタケの減少は、生育地のアカマツ林に何らかの大きな変化が起きたためだと考えられます。

●今のきのこの発生状況

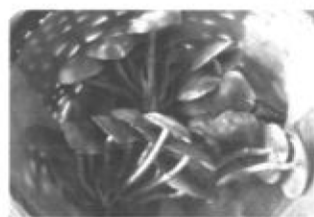
三熊地区、山田赤目谷や鎌倉、今山田で野外調査を2001～2003年に行った結果、308種類のきのこが見つかりました。かつてよく採られていた食用きのこは、なかなか見つからず、その量はわずかでした。ホンシメジなどは、見つけることができませんでした。きのこを探して歩いた林の足下は、下草や低木が多く、落ち葉が多く積もり、暗い環境でした。

調査中、雑木林内でよく目立っていたきのこは、テングタケ科の種類、モリノカレバタケ属の種類、クサウラベニタケやカワラタケなどでした。道ばたではドクベニタケやホコリタケなど、スギ林ではスギヒラタケとスギエダタケがよく見られました。古洞ダムの建設にともなって造成された場所には、若いアカマツ林

かつてよく採られていたきのこ



サクラシメジ（アカメ）



ナラタケ（モタセ）



マツタケ（ホンマツ）



ホウキタケ（小型なもの）
（ネズミタケ）

サクラシメジ、マツタケ、ホウキタケの写真は高島利男氏提供

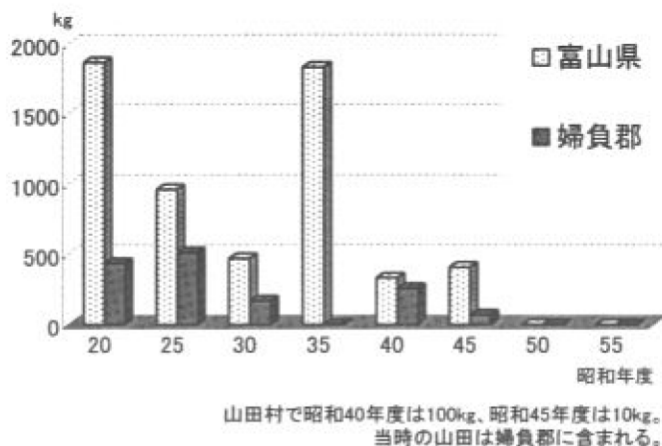


図1. マツタケの生産量

があります。そこでは9月になると、アミタケ（シバタケ）やハツタケ（マツメン）が出ていました。アミタケは、以前は食べなかったきのこですが、近年は食用に採っている人をよく見かけます。

調査期間中によく見られたきのこは、今の林の環境に合った種類と考えられます。また、見つかったきのこの中には、暖かい地方に生育するきのこが4種類ありました。

●きのこの顔ぶれはどうして変わったのか？

今では、かつてよく採られた食用きのこが大変少なくなることがわかりました。このことは、林全体が大きく変化したために、きのこの顔ぶれも変わってしまったためだと考えられます。変化が起きた主な要因として、次の3つが考えられます。

林が変化した

きのこの生育地の雑木林は、昭和30年代までは薪炭林として伐採や柴刈りがされ続けていました。昭和30年代半ばに、炊事や暖房の燃料が、薪や炭からプロパンガスや石油に急速に変わる燃料革命が起きました。燃料革命以後は林に人手が入らなくなったため、樹木が混み合い、下草や落ち葉が多くなり、腐葉土も積み、自然林に近づいた現在の雑木林になったと推測されます。食用きのこがよく発生していた林と現在の林の環境はずいぶん異なることでしょう。林が変わるにともなって、そこで生活するきのこの種類も変化したと考えられます。

マツタケが共生するアカマツ林は、日当たりが良く、土壌のやせた土地に生育します。アカマツは、周囲の木々が育ってくると、光不足になり、さらに落ち葉が

調査中によく見られたきのこ



シロテングタケ（雑木林）



コテングタケモドキ（雑木林）



クサウラベニタケ（雑木林）



カワラタケ（雑木林）



ドクベニタケ（道ばた）



スギヒラタケ（スギ林）



アミタケ（アカマツ林）

増えて腐葉土がたまるので生きづらくなります。燃料革命以降、伐採地が新たに作られる機会はほとんど無くなり、アカマツの生育できる場所は減る一方だったでしょう。また、調査中に、マツクイムシと俗称されるマツノザイセンチュウの被害を受けて枯死したと思われるアカマツも見られたことから、さらに打撃を受けたと思われます。現在の自然林に近づいた林では、アカマツは尾根のごく一部に生育するくらいに減っています。

生育地の消失

雑木林は、薪炭林としての役割をなくし、開発のため伐採されました。また、海外の安い木材の輸入によって、山林のもつ経済的価値はより低くなり、現在も低い状態が続いています。今後も、きのこの生育地は、開発によって失われていく可能性があると思われます。

気候変動

菌類であるきのこは、温度や湿度に敏感なので、気

候変動の影響が表れやすい生き物です。調査中に暖かい地方に出るきのこが見つかりましたが、近年の暖冬の影響の表れなのかもしれません。きのこの顔ぶれに変化をおよぼす要因のひとつとして、気候変動も注意する必要があると思われます。

3つの要因のなかでも、林の変化がもっとも大きく影響を与えたと考えられます。今後、雑木林が自然林に近づく速さはゆっくりになると思われますが、きのこの種類はさらに変わっていくと考えられます。

謝辞

きのこ調査は高島利男さん（富山市）と共同で行いました。昔のきのこについての貴重なお話は、松崎正信さん（三熊地区）、今井 博さん（山田地区）にうかがいました。心からお礼申し上げます。

文献

里山(富山県中央部)の自然環境調査報告書Ⅰ（富山市科学文化センター）、
富山県統計年鑑、
富山農林水産統計年報。

里山で見られるコケ植物

坂井奈緒子

コケ植物（以下はコケと略します）は、体全体で水を吸収できるしくみと小さな体のおかげで、土の他に、コンクリートや石の上、木の幹や枝も生育場所にする植物です。地域や標高によって生えるコケは異なりますが、ちょっとした環境の違いによっても違った種類が生育します。

里山では、どのような種類のコケが生えているのでしょうか。富山市三熊地区で調査を行いましたので、全体の様子と代表的なコケを紹介します。

◆コケの豊富なところと種類

三熊地区は谷に沿った土地で、上部に古洞池などのため池があり、下流に人家や田畑が連なり、斜面には雑木林やスギ林が広がっています。コケは、古洞池周りの雑木林の遊歩道沿いで種類も量も多くあり、切り通し法面、石の上、木の幹や枝、倒木の上によく生えていました。そこは、半日陰で、朝晩には少し湿る環境でした。その一方で、雑木林の中に入ると、ほとんどコケは見られませんでした。林の中は暗く、足下では草木が茂り、落葉や落枝が厚く積もっていました。コケが生えていなかった理由は、生長に必要な光が少ないうえ、落ち葉などでコケが埋もれてしまうためと考えられます。

アカマツ林やスギ林の中では、コケの種類は少ないながらも、アカマツの根元にはウマスギゴケや乾燥に強いカガミゴケが、スギの幹には白緑色のホソバオキナゴケが豊富に生育していました。

林で見られたコケの4割ほどは、道ばた、田畑、家の庭といった明るい開けた人家周辺でも見られる種類でした。

人家周辺では、林と共通するコケの他に、ギンゴケやヤノウエノアカゴケなどの明るい場所を好み、乾燥に強いコケが生えていました。

三熊地区では、全体をととして小型の種類が多く生え、111種類のコケが確認されました。富山県の里山に生育するコケについてのまとまった報告がこれまでにないので、他と比較することはできませんが、調査範囲が狭く、林内は全般的に乾燥しているため、記録された種類は少なかったように思われます。しかし、里山でよく見られる種類の多くが確認されました。

◆春に目立つ雑木林のコケ

雑木林では、若葉が萌える前の春先に、胞子体をつくるコケが特に目立ちます。木の幹や枝に生えるノミハニワゴケは、赤褐色の胞子体を伸ばし、まだ色味のない雑木林で鮮やかです。切り通し法面では、エゾミズゼニゴケのまるでモヤシのような柄の胞子体が見られます。

山が新緑につつまれる頃になると、胞子体が伸びてきたハミズゴケに気づきます。そして、倒木上では、クサゴケが多くの胞子体をつくっています。

◆ため池や田んぼのコケ

秋になると、ため池の水は減り、岸に泥地が広がり